

別記様式第6

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（文学）	氏名	泉川 普
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目 植民地期インドネシアの商業ネットワーク —1930年代ジャワにおける日本人商人の活動をめぐって—			
論文審査担当者			
主査	准教授	太田 淳	
審査委員	教授	河西 英通	
審査委員	教授	八尾 隆生	
審査委員	教授	金子 肇	
審査委員	准教授	太田 出	
審査委員	広島大学名誉教授	植村 泰夫	
審査委員	京都大学人文科学研究所教授	籠谷 直人	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、1930年代ジャワで活動した日本人商人の商品流通への関与と他集団との関係を考察し、ジャワ経済史における日本人商人と日本製品の意義を再検討するものである。</p> <p>序章はまず、従来のジャワ経済史研究において、主としてエスニシティに基づく特定の集団（日本人社会、華人商人など）内部の「まとまり」（相互提携・扶助など）の重要性を強調する傾向があることを指摘する。これに対し本論文は、日本製品を媒介とするネットワークにはオランダ系、華人系、現地系など様々な集団が関与したことに着目し、集団内部の「まとまり」とともに異なる集団間の「つながり」（仕入れ、取引などを通じた関係）を検討する必要性を指摘する。</p> <p>第1章は、戦間期の日本と蘭領東インド（以下、蘭印）との貿易関係を概観し、この時期に蘭印への日本製品輸入が増えたこと、オランダ系をはじめとする様々な業者が日本製品取引に参入したことを明らかにする。第一次世界大戦によって輸入が途絶えたヨーロッパ製品の代替として、綿布などの日本製品がジャワに輸入され始めた。当初その輸入と販売を担ったのは華人であったが、1928年の反日ボイコットを契機として日本人が小売業に進出し、オランダ系、インド系、現地人系業者が日本製品の直輸入を開始した。世界恐慌（1929年）によって購買力が低下した蘭印の住民は、安価な日本製品を強く求めるようになった。当初、植民地政庁は、住民の生活維持のために日本製品の流通を歓迎したが、本国産業界からの要望により非常時輸入制限令を導入した。もっとも植民地政庁は、輸入制限よりもオランダ系輸入業者に日本製品の取引機会を与えることを意図していた。</p> <p>第2章は、スマランの加藤長治郎商店を事例として、日本人商人が世界恐慌をいかに克服し日本製品の取引関係を構築したかを考察する。1910年代より加藤商店は主に美術工芸品をヨーロッパ人に販売していたが、世界恐慌によって営業不振に陥ると、安価な日本製日用品を扱って顧客層を広げ、業績を好転させた。その際には、ヨーロッパ系、華人系など多様な仕入先との関係が活用された。1930年代初頭に進出した日本人商店が安価な日本製商品に特化し、景気回復とともに次々倒産したのとは対照的に、加藤商店の幅広い商品の販売は、景気変動への対応と経営安定化を可能にした。</p> <p>第3章は、1930年代のバタヴィアにおける日本綿製品の流通の実態と、華人による反日ボイコットの意味とその影響を考察する。バタヴィアでは19世紀末以来、華人がバティック原材料として日本製未晒綿布を輸入していた。しかし1927年の反日ボイコットで日系、オランダ系、インド系業者が輸入に参入すると、ボイコットの影響は小さくなった。1937年の反日ボイコットは、当時の有力なバタヴィア華人商人である荘西言により、そのビジネス戦略として実行された側面が強い。彼は他の華人系業者の日本</p>			

製品取引を妨害する一方で、自分は密かに日本綿製品を輸入した。

第4章は、ジャワ東端部の村落に進出し、日用品の販売とともに農産物（主にトウモロコシと稲）の買付を行った日本人物産商に焦点を当てる。トウモロコシは日本で養鶏用飼料の原料として需要が高まったため、彼らはそれを日系商社に販売した。稲は華人精米業者に販売され、精米後、外領（ジャワ・マドゥラを除く蘭印領土）へと移出された。蘭印政庁は外米輸入を制限して、各地で発生した余剰米を外領に移出する政策を取っており、日本人物産商はオランダ系・華人系業者から資金を調達して1930年代に取引を拡大させた。

終章では、第1-4章の議論を要約した後、次の2点から当該時期の日本人商人および日本製品の動きを整理する。第一に、様々な商業集団は常に内部の「まとまり」をその経済活動に活用したが、世界恐慌など危機に際しては集団間の「つながり」の構築が重要となった。第二に、日本製品は特に1930年代にジャワ社会に広く流通し、その頃に日本人商人と取引した華人・現地人系商人は、独立後の国民経済で重要な役割を果たした。インドネシア国民経済の形成過程において、日本人や日本製品は「必要不可欠な外部者」であったと言える。

本論文は、論証にやや改善の余地がある箇所があるものの、蘭印における単純なエスニックグループの対立史観を打破する一方で、従来使用されてきたオランダ植民地政庁文書に加えてジャワ銀行文書や日本人商人の日記など、これまであまり使われてこなかった未刊行史料を大量に収集・分析して論述を展開しており、今後の学界の研究動向に大きな変革を迫るものと高く評価できよう。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（文学）の学位を受ける十分な資格があるものと認める。

備考 要旨は、1,500字以内とする。